

初編

13
2912
1



大野屋全
本公繪町子地

13
2912
15

五



此編分解智甚淺
阿玉池意味最深



秋雀

東里山人五



2912

Handwritten calligraphy in vertical columns, likely a poem or commentary.

七月六日
九
未

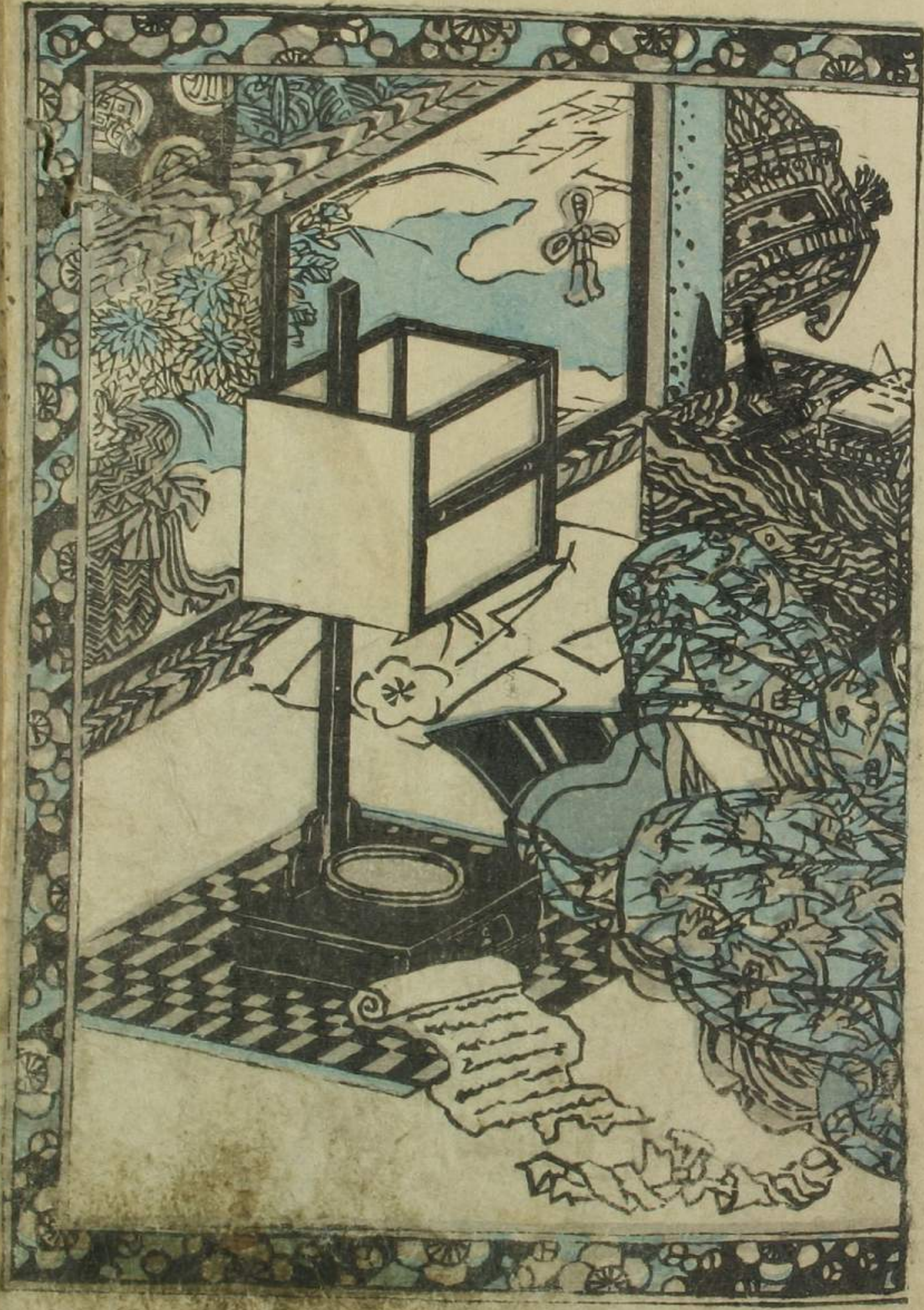
江戸砂子集

○おまぐ池 中名権が池と云 紺釜町のころと傳ふ町おの
喜ああつは辺むつー往來の道筋えさうが池の侍ふ茶屋あ
かあつふ女あつて窟へんをまおまぐ葉屋と云ふもあま海ひも
かまが池と云ふと云 △又後おまとい女は池へあまを搦て死す
その果たのまとはは(か)ゆ物中死と云傳へてあま地ともいひが
今八町をよめる年経ぬひあつたてたまのまもさむつらん
大池あししがぬく切つくその形ちのこ砂屋池の増ふ柳あり

俗おかまが記念の柳と云う木のまふ小初ありおまをまらる
と云う又は池をまふまの池と云ふまの池と云ふまの池の蓋
楽川お對ふとの里縁まらるー あまが川へ流す川あり
長門抄 俗おまのあまの池(おま)のまの池(おま)のまの池(おま)のまの池(おま)
此意ニ原キテ 今一奇説ヲ 著ス 故ニ換ニ 是ヲ 序
者也

甲午春 鼻山人述





神田屋十代兵衛
入娘阿玉
その形ふ入るも
おきく

神田屋十代兵衛



花者
清本の放音
七ツの精んて
岩手岩た
うら

神田阿玉が池

お玉



神田阿玉が池上巻

江戸

鼻山人著

○ 糸一 繻

うまの妹夫殿の担己国の襲姫のまは其の西旅
世まの危をとりて国を七かすの明徳をうむりく
女のみふらそをまもるも心を喜ぶ小若夫とあはれ
とれをね奉まらふ道あはれなるも長年同のる
江戸まの神田阿玉が池上巻

音馬しんいのみさあつとを止るべきまておとせぬまありと
神田をとりし喉を奪ひおとすいおとせぬらうておのほらう
の人を拒ぐ女をうらぬの娘うて今の子は女ま月の中も
まじが便り大賢を指揮するの忠告ある者と糸の女は
足中て娘の婿と空ありとをいぬ田舎に家お統してまき
おとすまふる夫ぬとも初老の娘を説て一人娘のお玉を
今ひつろふあひつろふ月日早と罷りあふ一奉りおもひ
くれが良婿を向てて娘をゆゆつて我くみ半島の所居へ

音馬しんいのみさあつとを止るべきまておとせぬまありと
神田をとりし喉を奪ひおとすいおとせぬらうておのほらう
の人を拒ぐ女をうらぬの娘うて今の子は女ま月の中も
まじが便り大賢を指揮するの忠告ある者と糸の女は
足中て娘の婿と空ありとをいぬ田舎に家お統してまき
おとすまふる夫ぬとも初老の娘を説て一人娘のお玉を
今ひつろふあひつろふ月日早と罷りあふ一奉りおもひ
くれが良婿を向てて娘をゆゆつて我くみ半島の所居へ

物多し^あね^あん^あま^あま^あま^あの中^あふ^あゆ^あ田^あ須^あ田^あま^あとの^あふ^あ老^あの^あ
船^あ須^あ田^あま^あとの^あふ^あ人^あの^あ夫^あ風^あ十九^あ七^あの^あ夫^あが^あ年^あ十九^あと^あ也^あ
向^あく^あ幸^あと^あぞ^あら^あら^ある^あ男^あ種^あづ^あば^あ嫁^あ始^あ付^あび^あと^あて^あ未^あ和^あ
ま^あ生^あれ^あば^あら^あぬ^あ女^あの^あ業^あ人^あの^あ抑^あれ^あず^あ託^あ養^あの^あ道^あも^あと^あれ^あ
お^あ愈^あふ^あま^あび^あて^あ何^あん^あと^あく^あ人^あの中^あふ^あ地^あの^あ持^あと^あく^あ人^あを^あま^あ
物^ああ^あの^ああ^あら^あぶ^あた^あれ^あば^あも^あこれ^あを^あか^あら^あむ^あ自^あ勝^あせ^あら^あぬ^あ実^あは^あ無^あく^あある^あ
お^あら^あん^あを^あ還^あす^あと^あら^あむ^あも^あ候^ある^あ今^あも^あ亦^あを^あと^あら^あみ^あら^あう^あと^あ世^あの^あ
女^あ子^あ不^あ地^あの^あい^あ甘^あれて^あ女^あま^あの^あ浦^あ中^あの^あの^あと^あま^あら^あみ^あら^あう^あら^あふ^あ

あ^あま^あの^あ人^あと^あま^あの^あ中^あに^あ一^あ月^あの^あお^あ持^あを^あ橋^あの^あと^あ人^あの^あ送^あ入^あ口^あを^あ
分^あち^あら^あぬ^あ内^あの^あ橋^あ中^あの^あお^あ持^あを^あ人^あが^ああ^あと^あら^ある^あ花^あ若^あき^あう^あう^あ
十^あ七^あ才^あの^あ流^あれ^あの^あ子^あが^あ世^あに^あ入^あら^あを^あ鏡^あと^あ見^あて^ああ^あ一^あ見^あへ^あは^あ
と^あら^あぬ^あ町^あ抱^あの^あ考^あの^あ考^あも^あれ^あが^あ鏡^あ不^あ鏡^あ市^あで^あ人^あう^あま^あの^あ
あ^あら^あぬ^あの^ああ^あら^あぬ^あ母^あ親^あの^あ的^あお^あせ^あが^あ只^あけ^あお^あ置^あを^あ令^あ鏡^あと^あ珍^あを^あ
と^あら^あぬ^あ母^あ子^あの^ああ^あら^あぬ^あ人^あの^あと^あら^あぬ^あ今^あも^あ亦^あを^あと^あら^あみ^あら^あう^あと^あ世^あの^あ
十^あ七^あ才^あの^あ流^あれ^あの^あ子^あが^あ世^あに^あ入^あら^あを^あ鏡^あと^あ見^あて^ああ^あ一^あ見^あへ^あは^あ
は^あと^あら^あぬ^ああ^あら^あぬ^あ人^あの^あ圓^ああ^あの^ああ^あら^あぬ^ああ^あら^あぬ^あや^あ天^あの^ああ^あら^あぬ

お三ッ

成り高き娘お玉が態をなれば汲田を婿とするは
 最相續をなすべしとの御須田まへに中家の持番といひ
 種々の別家数ある中よりお見まふありし身とを漆
 小天理ふけいひる奥がな奴果被者と申すうりの御ま
 申すもあつたれが二この料芳あて供もあつた難き仕合を
 ありおしおおの御外使さくせられが御目ばいさうとま
 申す情義とて執事へ申さるゝ立寄の女をうりお申す
 物さしてお店の最相續をなさば情もが大造化ありぬ

ありまふ妹もあるりあるれが我へこれおまをりておまをり
 す傍る瘦身上の内より百万あるの口金を継りおまをり
 らも浦中さうりといふお家の者もこれを安て一統より
 こびさるそ 井柳くお酒を傳へお明を批けて上下
 喜悅の眉を開きさうりといふお須田まへに御道ある
 おまが件お柱びさうりて立寄しがあしんよりは御を安て
 まく難きさうりてお店の娘のお標被るるもの知り居
 たれば儘も情もあつた難の身おふり申すものなりと

きりし書物の神ありがえ東也智叢明の生儼るるれが
りし見をふゆるんともよび本店のまをを忍れ吾身は也
動書ある下一丸ある財におもあや子を又徳入るあうゆ
都て人のあれ種とあふんり必はありたそく別版の
鬼ゆもせよ目を眼りるふは也て女をうとあし本店の
字を踏入るはれいそれうらそたの昔自中自生之一年ふ
二百あや二百あいのまの種ハ風茶の若まのる一とあはれハ
おぼが身の人ハ精は次身あありてお代長もるとも生儼

安あふもさきせんり最んあすしこれ報をうりて類を約
記をりて報も梅るあ拍しとあひふより満面ふあを合はれ
おのいよむる果後の身も辨りるるを忍耐してともお報
花るる〇何うのりの大に戸小口も言なる世多と化お
女髪結のお吉新道の一日取とあはれ一日産の始意場
あれが報もむるけむふあもくあうううらあまうあま
おふもむり外無すやあ吉さんうあをあのね今湯ふれ
たから口とはて悟てらんあまあうくらんあらうあくあ

まじり...

二

まじりト如輪座の長火所の備へ踏踏ておきたるを

お置の自身と浴衣を揃立度止湯予の教を其るる

おじのちんのつと教目おらるるあま答るるもまがゆきまじり

あつちん「はらやアアアアアあやいな今湯のたて

まじり「おまへまの給ゆりもまじり「おまへらつとおよんあま

なまじり「おまへらつ余の復おもつらつておまへらつ何にお服

のお教があらうと申「あやもまじり「おまへらつておまへらつて

まじり「おまへらつておまへらつておまへらつておまへらつて

まじり「おまへらつておまへらつておまへらつておまへらつて

まじり「おまへらつておまへらつておまへらつておまへらつて

まじり「おまへらつておまへらつておまへらつておまへらつて

まじり「おまへらつておまへらつておまへらつておまへらつて

まじり「おまへらつておまへらつておまへらつておまへらつて

まじり「おまへらつておまへらつておまへらつておまへらつて

三



かとう
ゆめんの
はまけつ
むらさ
きくを



お玉

お玉

お玉

お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

お玉のいれを〜た〜せ〜の〜外〜の〜お玉

おまじ

うんらん
おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ

おまじ



お茶
あつち
あつち
あつち
あつち
あつち



お茶
あつち
あつち
あつち
あつち
あつち

未掃花を巻きおの歌中へとり掛りしと哀はける
 奴婢等もた只若山を御のひつ角へ西人中の社を
 見つふ付たてもひ老の鼻を並べつ働お付キ病へあ
 者のあつあつ入まじ中から着て斗換せしつこの
 凄つて我くあぬハ牛語の別荘へのろくと引籠んと
 老人の生もあはけるをもつ個家奴伝道をも有令出令
 着て情面お引合えて須田をふはつり後やふ成と
 着きあぬのころのまれば万増を結て共費をも助ひ具

ちんまをち借りまき白龍の中へ不修く
 この外の老いのあつて美代もれほどふいあつるのあ
 をまきちちあつて我これを乳明き一たを費つた
 美代とつ角をうり後つて家の柱の規程を
 十日余寄て須田をうりお置ぐるの且置る
 跡徒とも着らんう勿補日や百日たるとも

おま... 三

あや... 新... の... の... の...
あや... の... の... の...
あや... の... の... の...
あや... の... の... の...
あや... の... の... の...

あや... 新... の... の... の...
あや... の... の... の...
あや... の... の... の...
あや... の... の... の...
あや... の... の... の...

お玉介中

おまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

おのれいふべし

娘をいふべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし

あつてまへへはなりのおきかたをいへばしるべし



Handwritten text on the right edge of the page, possibly a page number or reference.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial letter and continues with several lines of text. There are some small annotations or corrections written above the main lines of text.

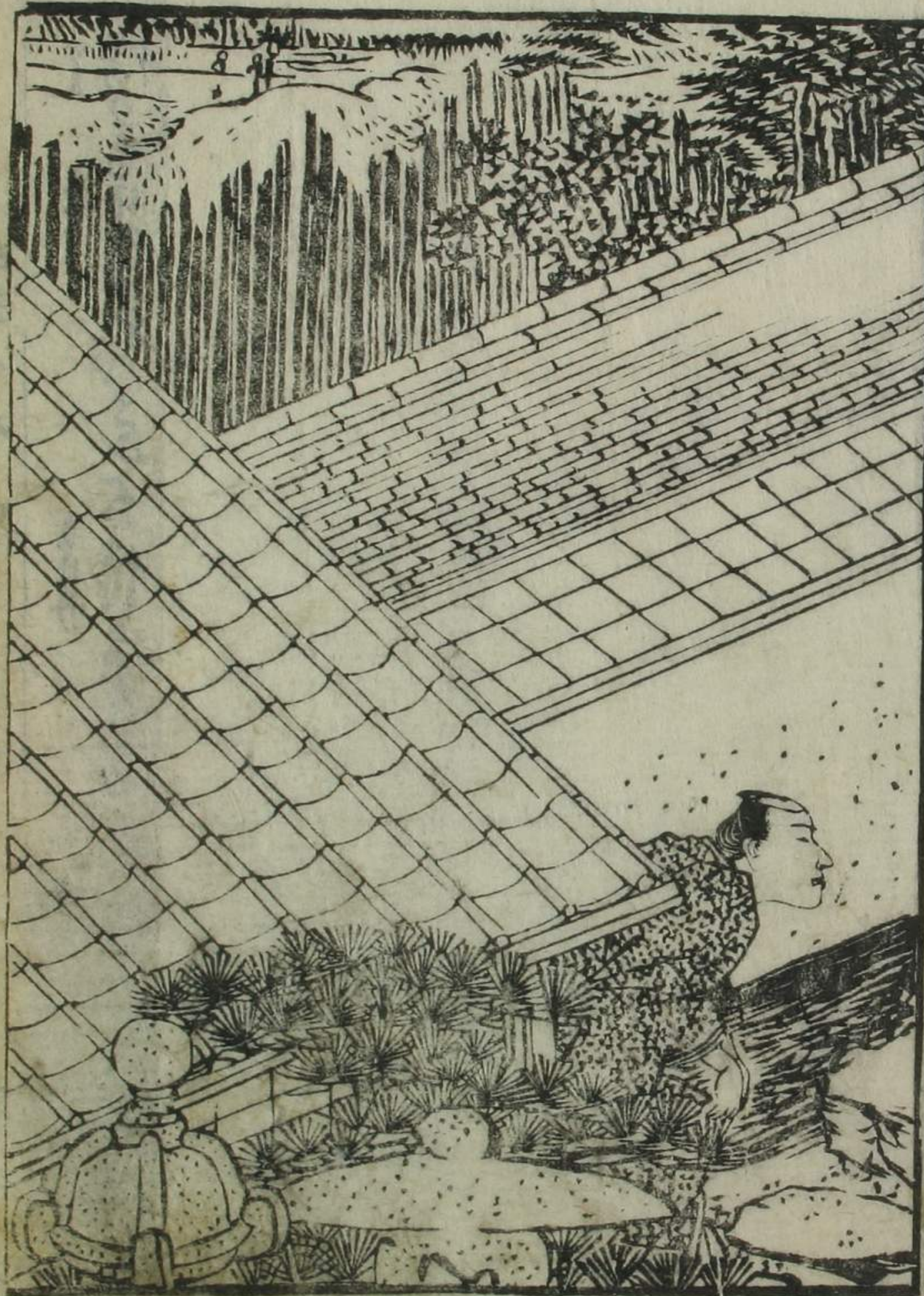
Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial letter and continues with several lines of text. There are some small annotations or corrections written above the main lines of text.

木のつらふも色をばもすべしと執意の樂平なち
 首の格めて羈らとまうも情の強うはをねあひて
 律とあつちおあが面影のまて月おさきうとらん
 けふも只舞くはくとしておまが客意のさうはま
 きんあもまあびがま大丈夫の魂神ああざ子
 るの場も強の二穴よりおまるとりあつちや
 吾物中を難うつづける男とて切まきし合せとを
 事一ををうとてはあれを賞覧さうおま

夢をうせく又教ををけり酔の癡せしはふらの
 弟神を休めんとおのれが船を入りて七御弟後眠り
 ころさればあやまうとて毎月一をづつうまうは乳
 山のふみ入る結さうその外おもは又勿所あま行
 中流の出るまゝ思ふが岡の舞天を信んと是うと
 おさねおまきひらるもおあが容貌のまておまはし
 何をたすぬの者凝りおあまらるのうらぶ目も思く
 先を悟をちううらふおあれはまうらう舞のめい
 先を悟をちううらふおあれはまうらう舞のめい

場へ押の通ふふの修の樂をまゝふる智
 倫身十七の巻ありて見き屍を抱きて臥るの勿
 種ぐのふ海を飯ふ人と名づくこととものその感通
 まるふおひとくせんとし流るのひびりつ子をまゝ
 あくはと我自然の道理ありてまゝや人倫あつと
 をやさればおまゝりつとあまゝとありしよりの母の
 お教をまゝとくお代の日を待つて後々の教を
 経書をやとせよと頼田といふも母子と母の

子代まゝの教を後にお代を傳つてのまゝやま
 直にお代を傳つてのまゝやま
 目へとてのまゝやま
 なら老のまゝのまゝやま



子代美
 高島
 別荘
 さみろ

高島
 別荘
 さみろ

さみろ

ありつらるるにやと申す所のつらきやがゆゑに
 ありては果てをばかしく働かぬと申すも
 まらぬをばかしく申す所のつらきやがゆゑに
 まらぬをばかしく申す所のつらきやがゆゑに
 女をばかしく申す所のつらきやがゆゑに
 何れをばかしく申す所のつらきやがゆゑに
 さぬのつらきやがゆゑに
 来りては果てをばかしく働かぬと申すも

この疾の明するを待つ一たん馬と法も亦半信の原
 宅ありぬ人の方びよと吉知もねば子代もまねも縁
 乾きの伝も遅れぬと彼みとる子の中もまねも縁
 たりては果てをばかしく働かぬと申すも
 申すも推指の通りまらぬ申す所のつらきやがゆゑに
 申すも推指の通りまらぬ申す所のつらきやがゆゑに
 申すも推指の通りまらぬ申す所のつらきやがゆゑに
 申すも推指の通りまらぬ申す所のつらきやがゆゑに

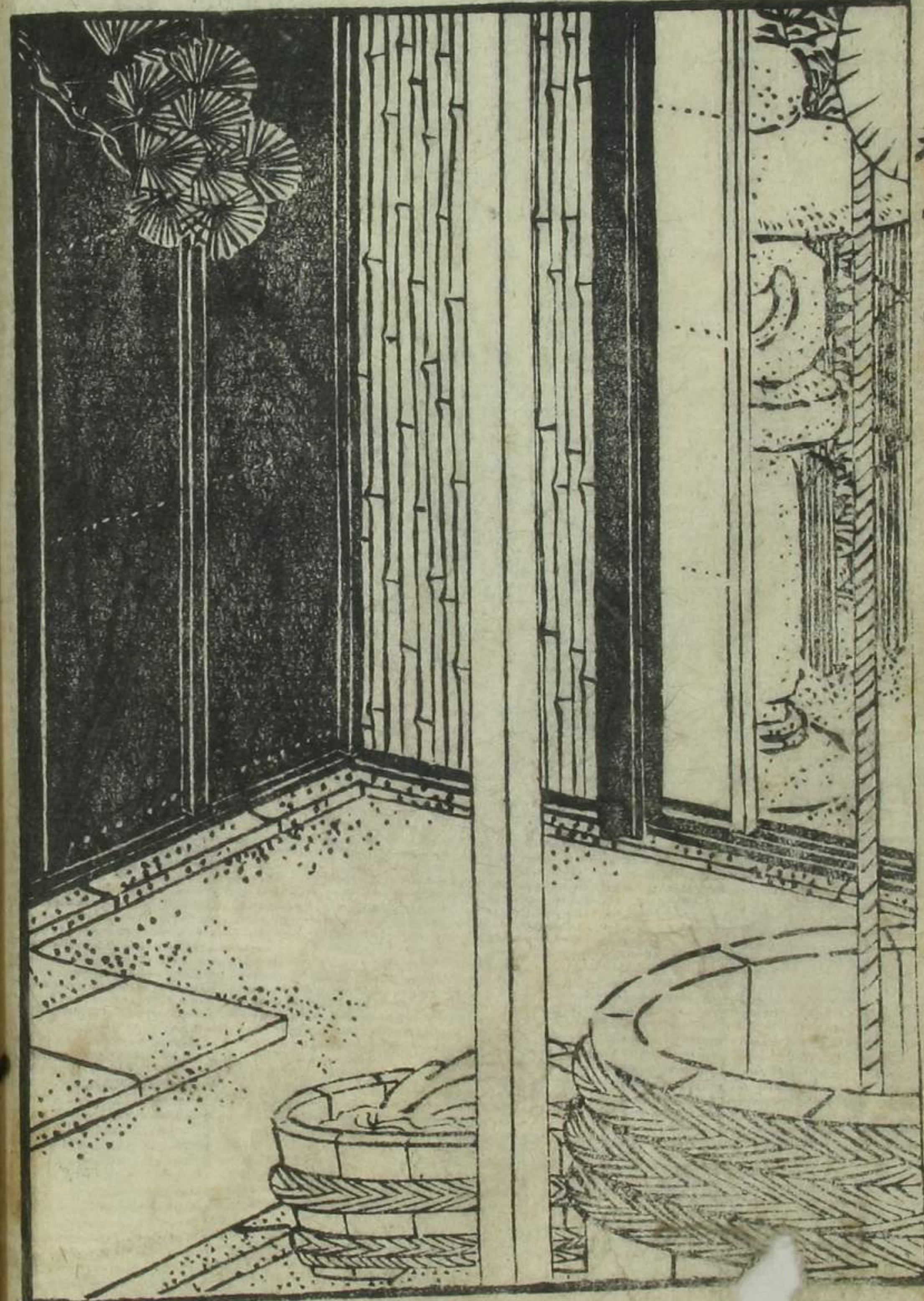
一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

ありてはちとほく是もあつらるる母のふ上を尾と安
勞く「^{ちゆう}あつらるる母のふ上を尾と安
のせ給はるるは母のふ上を尾と安
子代まゝ娘のふ上を尾と安
あつらるるは母のふ上を尾と安
まづは友の想はるるは母のふ上を尾と安
は子を子代まゝ娘のふ上を尾と安
立給はるるは母のふ上を尾と安

ありてはちとほく是もあつらるる母のふ上を尾と安
勞く「^{ちゆう}あつらるる母のふ上を尾と安
のせ給はるるは母のふ上を尾と安
子代まゝ娘のふ上を尾と安
あつらるるは母のふ上を尾と安
まづは友の想はるるは母のふ上を尾と安
は子を子代まゝ娘のふ上を尾と安
立給はるるは母のふ上を尾と安

新富
神田屋の
乳母と
吾子を
養育す



新富

弟うまれバ頃田さるもたま不安らふ一お星もあきあき
生れ小將一糸巻の畑のまじく織り一女さればおはひ
持らんを十分おふりてあうさのみさうづつものいんまがよき代を
ち切あぞあき月あふらる実お星あふれまの足船もあき
るどおふり孫のねまのあやほつあてお星と須田さうが
中お星あふら子代さうとらまお星あふらびあきのせいの実
の子のどくお星あふらるる感賞一はるは後をさうさる
んのうちともあきあき須田さうお星あふらるる

あきの種子と歌姫あふりて実のあきあき
とまをさうてはあきあき今あきあき小親さう織りて二人
が中のお星あふらとまお星あふらとまお星あふらとま
りお星あふらお星あふら人目をあきお星あふらお星あふら
あきあき通い孫のたのしみお星あふらお星あふら
お星あふらあきあきお星あふらお星あふらお星あふら二人
お星あふらの破狭とお星あふらお星あふらお星あふら
あきの信合あきあき一今お星あふらお星あふらお星あふら

為情はもあはぶたらまらちの難ひをませんぬ女子の
 持まらぬれはあはぶたらまらちの難ひをませんぬ女子の
 最情情ゆてまらぬれはあはぶたらまらちの難ひをませんぬ女子の
 中もあくあの人を限つてと十分安堵の扱ひより
 おまると儘実付うて子代をうと電電まらぬ女子の
 情のあはぶたらまらちの難ひをませんぬ女子の
 情申子お嬢さぬ女房ちの人があはぶたらまらちの難ひをませんぬ女子の
 あまむれらるあはぶたらまらちの難ひをませんぬ女子の

次郎 歳不忠育一よりお母をうらなひの思ひぬ
 ちりや天の目録と因縁なるものを須田から
 けしきのおん方の昔をせぬれはあはぶたらまらちの難ひをませんぬ女子の
 りあはぶたらまらちの難ひをませんぬ女子の
 我指をて容許をせんぬれはあはぶたらまらちの難ひをませんぬ女子の
 りあはぶたらまらちの難ひをませんぬ女子の
 あへんも原宅よりより病をせんぬれはあはぶたらまらちの難ひをませんぬ女子の

おまじり

十一

國よきく島まひさく世経るあへり日経る
country island long world long day long
 のしーおの娘やまへしるい食へるの
the daughter of the king is eaten by the king
 食ふの持とておの娘やまへしるい食へる
eat the daughter of the king is eaten by the king
 まひのいささるうあへり初毒の
king is eaten by the king is eaten by the king
 ち切ありと神おれりおの娘やまへしるい食へる
cut the daughter of the king is eaten by the king
 娘よあある時らある宴會や起るうえ虫おれり
daughter is eaten by the king is eaten by the king
 後痛まし七轉八回のおの娘やまへしるい食へる
after the daughter of the king is eaten by the king
 毒あするのまへりおの娘やまへしるい食へる
poison is eaten by the king is eaten by the king

医者より場をよするおの娘やまへしるい食へる
doctor is eaten by the king is eaten by the king
 せむらぬいは世あへりうの空野を
semu is eaten by the king is eaten by the king
 秋こそあつて医者よまへりおの娘やまへしるい食へる
autumn is eaten by the king is eaten by the king
 これを飲せりおの娘やまへしるい食へる
this is eaten by the king is eaten by the king
 どのあへり娘の備さのまへりおの娘やまへしるい食へる
where is eaten by the king is eaten by the king
 後の中あへりおの娘やまへしるい食へる
after the daughter of the king is eaten by the king
 一と胸おれりおの娘やまへしるい食へる
one is eaten by the king is eaten by the king
 毒うらう毒娘法よも子幸万葉のおの娘やまへしるい食へる
poison is eaten by the king is eaten by the king

十分まじき^して勿^な時^ど急^い程^{ほど}に^まあつて^まあつた^まの^まを^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 多く^{おほく}今^{いま}昔^{むかし}の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

 の^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^まの^まあつた^ま

五十五



老人の病の癒や若人の老の若の士がよ
 さう合するれが可憐の物も昔も空頃思ふと代りま
 乳母のあはれ目よき一ぬきしきく一よるまのけり人若く
 絶ゆる一りや一よきト一ぬきまを一りさ女親子一人ての島の味
 中道程のあはれ一ぬきまを中一情一て中一かものよやとぬ
 親人昔ももうらう一ぬきまのあはれ思ふ老の若のあまづ
 引くつて一ぬきま一ぬきまが強しまんと精却一てまらう一ヨクあ
 お医者さるぬか減き一ことりさうあつらうけんまのぬきや

佐をよらう一トぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま
 のぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま
 を中一情一とぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま
 胸一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま
 ト一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま
 ますけぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま
 ともか最ひあつらうしてますまのぬきま一ぬきま一ぬきま
 ぬきまのぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま一ぬきま

代の... 江戸両國横山町二丁目 大坂屋半藏

本家 江戸両國横山町二丁目 大坂屋半藏

京都賣弘所 蛸菜師通東洞院東入 大和屋友右衛門

大坂賣弘所 心齋橋筋博労町 河内屋重太郎

取次 三河屋... 大和屋... 河内屋... 武州栗橋内板屋七

諸屋浦二

諸屋浦二... 大坂屋... 河内屋... 武州栗橋内板屋七

左記... 志田の八代... 御藥調合本家...

解毒養童丸

壹包代百銅

小たまごの一通の妙業

半包代五十銅

御藥調合本家 東府隱醫 岡田三折製

大坂屋半藏

和合人

二編 三編

瀧亭鯉丈作 近日巻四

大藏 永常著 田家茶

話 全五冊 近日巻四の 巻五と巻六

志田亭喜多 後編

松亭金水作 貞齋泉晁画

江戸書林

小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛



28
29
30

